

北宋期、陝西における将兵法について

與座良一

緒言

北宋期の陝西地方はタングートの西夏と接する地域であったため、多数の禁軍が駐屯し西夏の侵入を防ぐ努力がなされてきた。そこで軍団を統御するための安撫司路が設定され、指揮命令系統の改善が図られた。^①さらに禁軍に加えて蕃兵や弓箭手など、いわゆる郷兵がさかんに召募され禁軍とともに辺境防衛にあたった。禁軍や郷兵は辺境地帯に建設された多くの城寨に分散され、これらの城寨などを利用して西夏の防衛にあたる防衛策が策定された。

いっぽう北宋後期の軍事制度である将兵法は、軍隊の更戍をやめて現地の兵力を「将」という軍団に編成する制度である。将兵法は仁宗時代に范仲淹が行った延州の禁軍改編を嚆矢とし、神宗時代に入ると四川を除く全国各地に施行される。陝西においては熙寧八年（一〇七五）、改めて将兵が編成され禁軍に加えて郷兵も将兵に編入される。^②これは陝西以外の将兵が就糧禁軍のみで編成されているのと大きく異なる点である。陝西に駐屯していた各種禁軍と現地で召募された郷兵は、陝西特有の事情すなわち対西夏防衛のため、一つの将という軍団に組織されたのである。同じく対西夏防衛を目的として設置された安撫司路や城寨建設の問題はしばしば論じられてきた。^③将兵法については弓箭手との関わりから小笠原正治氏が^④、また蕃兵制度からは江天健氏や金成奎氏が言及されている。^⑤しかしながら安撫司路や城寨に関して見られる研究のように、陝西の対西夏防衛の中で将兵法自体を論じることは充

分になされてきたとは言い難い。

そこで本論では陝西の将兵法施行の推移を、陝西における防衛政策の中で考察しようとするものである。

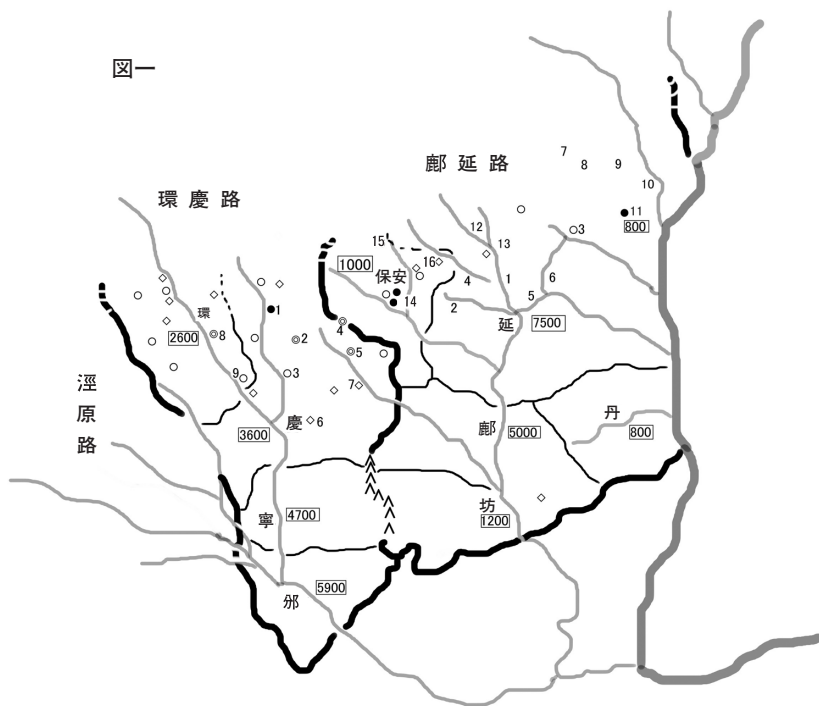
第一章 熙寧初めの兵力配置

先述したように、陝西の将兵には禁軍のほか弓箭手や蕃兵などの郷兵が含まれる。将兵法施行以前も禁軍と郷兵はともに西夏との戦闘に参加していたが、同じ軍団に編成されたことはなかった。将兵法に至り初めて同一の軍団へ編成されたのである。そこでまず禁軍と郷兵が将兵法の下で同一の「将」へ編成される以前の状況を確認すべく、熙寧四年（一〇七一）以前の陝西における就糧禁軍と蕃兵の兵力配置を見ておこう。

熙寧四年の時点を設定したのは、熙寧初年に始まった軍制の改革が四年に至って一つの区切りを迎えるためである。陝西地方の禁軍は仁宗代の対西夏防衛のために急激に増加したが、神宗代になると冗兵の削減が行われ、熙寧三年整理された兵力によって定額が定められた。^⑥このうち陝西路一路の兵額は十万人と定められている。^⑦また同年禁軍の更戍法についても改革が行われ、陝西には京西から禁軍が更戍した。^⑧そして翌四年には西夏の侵攻に対して具体的な対処法を定めた「防秋策」が策定された。^⑨

また就糧禁軍と蕃兵について取り上げるのは、『宋史』兵志にそれぞれある程度まとまった兵力が記載されているためである。

史料上、国境地帯は沿辺（さらに極辺と次辺に区分）といわれる。本論では前線地帯という語を用い、熙寧四年の防秋策から当時神宗政府が認識していた前線地帯と防御拠点、そして後方地帯を確認しておく。防秋策には各路ごとに想定される西夏の侵入経路と対処法、そして活用される城寨が記されている。詳しい考察は先行研究に譲り、^⑩当時の城寨などを以下に挙げてみる。なお城寨に付した番号は、地図一・二の中の番号に対応している。



蕃兵数：◇—1000人未満、○—1000人以上、◎2000人以上、●4000人以上（詳細は表一参照）

□内数字は就糧禁軍数

算用数字は熙寧四年防秋策の鎮・城・寨・堡

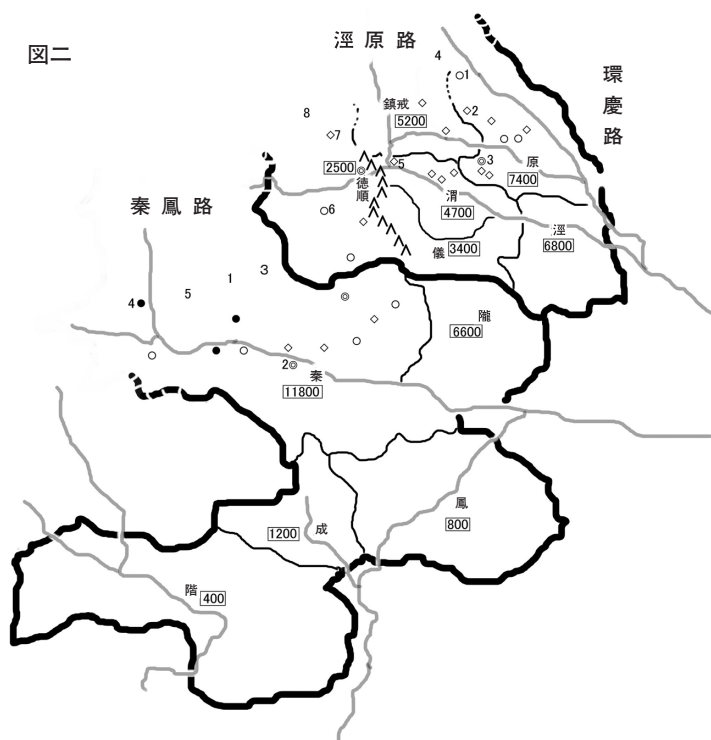
（図は譚其驤『中国歴史地図集』第六冊、中国地図出版社、一九八二、を基に作成）

①涇原路

涇原路では、例えば西夏が原州の1靖安寨・2綏寧寨を寇した場合、原州の兵は出さず、一万人の兵で3平安寨を守り、南進する路を抑えるとともに、想定される敵の進路と防御方法が記されている。そのほか明記されている城寨は、鎮戎軍と鎮戎軍の4乾興寨、渭州と渭州の5瓦亭寨、徳順軍と徳順軍の6静辺寨・7隆徳寨・8得勝寨、などである。またもし西夏が徳順軍を寇した場合、静辺寨を一万人の兵で守り、郷兵の一種である弓箭手を遊撃隊とし、瓦亭寨の五千人を移して徳順軍に入れるとあり、弓箭手が遊撃隊として活用されている。

さらに「鎮戎軍第四将及弓箭

図二



手」とあることから、鎮戎軍に第四將が置かれていたこと、將兵の中にはまだ弓箭手が含まれていないことが明らかとなる。そして「其れ諸城寨は只だ守兵を留め、責むるに戦を以てせず。渭州は只だ一將兼ねて義勇を以て防守し、其餘の兵、並びに瓦亭に屯し、以て根柢を固め、左右相い援け、勢を合わせて掩殺せよ。」とあって、涇原路の防衛点が渭州の瓦亭寨であることがわかる。よって涇原路では、原州・徳順軍・鎮戎軍が前線地帯の州であった。

②環慶路

環慶路では、慶州と慶州の1淮安鎮・2柔遠寨・3業樂鎮・4大順城・5荔原堡・6合水県・7華池寨、環州と環州の8木波鎮・9馬嶺鎮などの城寨がある。環慶路の防衛拠点は慶州であり、慶州と環州が前線地帯の州である。

表一 陝西の蕃兵数（『宋史』巻一九一、兵五、郷兵二、蕃兵の条）

路 名	軍・城・堡・寨・鎮名(人数)
涇原路	平安(兵馬2384)・綏寧海寧(兵馬788)・靖安(兵馬1982)・瓦亭(兵馬591)・德順軍(強人3676・本軍兵馬2502)・隆德(兵馬256)・静辺(兵馬1807)・新城(兵馬341)・截原(兵馬596)・開辺(兵馬1254)・新門(兵馬1073)・西壕(兵馬454)・柳泉(兵馬986)・安国(兵馬634)・耀武(兵馬32)・新砦(兵馬109)・東山(兵馬202)・彭陽城(兵馬184)・水洛城(兵馬1354)・通辺(兵馬176)
環慶路	淮安(強人4368)・柔遠(強人2381)・大順城(強人3491)・荔原(強人2221)・合水(強人631)・業樂(強人1172)・木波(強人2169)・馬嶺(強人1016)・安塞(強人351)・洪德(強人273)・肅遠(強人1559)・烏崙(強人684)・永和(強人1255)・平遠(強人540)・定遠(強人748)・合道(強人1565)・石昌(強人462)・团堡(強人1022)・東谷(強人459)・西谷(強人1794)・平戎(強人1085)・五交(強人1107)・鳳川(強人875)・華池(強人262)・府城(強人233)
秦鳳路	三陽(兵馬3467)・古渭(兵7700)・隴城(兵馬2054)・弓門(兵馬1704)・冶坊(兵馬360)・床穰(兵馬1080)・静戎(兵馬625)・定西(兵馬600)・伏羌(兵馬1992)・安遠(兵馬5350)・来遠(兵馬1574)・寧遠(兵馬7480)
鄜延路	永平(東路都巡檢所領1754)・青澗城(4510)・西路德靖(同都巡檢所領1114)・德靖(西路同都巡檢所領二十族7805・小胡等十九族6956)・園林(822)・竜安(599)・安定(東路都巡檢所領1989)・保安軍(361)・保安軍(北都巡檢所領1441)・肅戎軍(748)

③ 秦鳳路

秦州の1甘谷城・2三陽寨・3青鷄寨・4古渭寨・5通渭寨などの城寨があり、秦鳳路の防衛拠点は秦州で、秦州のみが前線地帯の州である。

④ 鄜延路

延州の1金明寨・2万安寨・3永平寨・4招安駅・5豊林鎮・6青化鎮・7黒水堡・8綏平寨・9懷寧寨・10順安寨・11青澗城・12安塞堡・13竜安寨、保安軍と保安軍の14德靖寨・15順寧寨・16園林堡などの城寨が確認される。そして鄜延路の防衛拠点は延州であり、延州と保安軍が前線地帯の州といえる。

以上、熙寧四年の防秋策を見ることによつて同じ陝西路内でも防秋にあたる前線地帯の州軍と、後方の州のあることが明らかになった。次に前線と後方の地域

にどのように就糧禁軍が配置されていたのかを、『宋史』卷一八八、兵二、熙寧以後之制より各路ごとに見ておく。

①涇原路

涇原路の場合、一路で三万人の兵力があり、前線地帯である原州・徳順軍・鎮戎軍の兵力は原州（七四〇〇人）・鎮戎軍（五二〇〇人）・徳順軍（二五〇〇人）、三つの州軍を合わせた数は一万五千百人である。よって涇原路の兵力のうち半数が前線地帯に配備された。そして残りの半数は後方の渭州（四七〇〇人）・儀州（三四〇〇人）・涇州（六八〇〇人）に配備された。各州の兵力は他の路のように大きな差は見られないが、原州の次ぎに多いのが後方の涇州であり前線の徳順軍よりも倍以上多い。

②環慶路

環慶路は一万六千八百人の兵力のうち、前線地帯の慶州（三六〇〇人）と環州（二六〇〇人）を合わせて六千二百人の兵力しかなく一路全体の半分にも満たない。最も後方に位置する邠州の兵力（五九〇〇人）が最大であり、次に多い北隣の寧州（四七〇〇人）と合わせた兵力は一万六百人である。この二州で三分の二近くを占めている。環慶路の就糧禁軍は北の西夏との境界に近づくにつれて少なくなり、防衛拠点の慶州よりも南の寧州や邠州のほうが多いのである。

③秦鳳路

秦鳳路の場合、一路の兵力は二万八百人であった。前線地帯の秦州（二一八〇〇人）が半数の兵力を有し、残りの九千人が後方の隴州（六六〇〇人）・成州（二二〇〇人）・階州（四〇〇人）鳳州（八〇〇人）に置かれている。

④鄜延路

鄜延路の場合、一路全体の兵力は一万六千三百人である。前線地帯の延州（七五〇〇人）と延州の清澗城（八〇〇人）・保安軍（二〇〇〇人）の兵力は合わせて九千三百人であり、一路全体の半分強である。残りの七千人は後方の鄜州（五〇〇〇人）・坊州（二二〇〇人）・丹州（八〇〇人）に配備されている。鄜延路では後方よりも前線地帯の兵力の方が多いが、延州について後方の鄜州の兵力が他州よりも多く、二州を合わせた兵力は一万二千五百人となる。

以上、各路各州軍の就糧禁軍の配置は前線と後方の兵力が拮抗しており、州毎に比較すると最も兵力の大きい州が前線にあっても、二番目の州はいずれも後方にあった。それでは蕃兵の配置はどのようになっていたのだろうか。

慶曆（一〇四一〜八）の頃に蕃兵を出した熟戸は鄜延路では延州・保安軍の界、環慶路では環・慶州の界、涇原路では原・渭州・鎮戎軍の界、秦鳳路では秦・鳳州の界に居住していた。^⑪慶曆以降、蕃兵が弓箭手などともに辺境防衛に用いられたことはすでに先行研究によって明らかにされている。^⑫蕃兵を含めた郷兵はその後の西夏との戦闘が激しい時期と、比較的西夏との関係が安定した時期とで兵力に増減があった。例えば鄜延路では宝元用兵（一〇三九〜四二）の後、蕃・漢弓箭手がほとんどいなくなったといわれ、^⑬治平元年（一〇六四）には西夏の侵攻によって秦鳳・涇原路の熟戸や弓箭手の人畜一万以上が殺されるなどしている。^⑭

よって表一と図一・二に示した『宋史』蕃兵の条に載せる治平年間（一〇六四〜七）の蕃兵兵力と配置も大まかな目安ということになる。図で確認されることは、慶曆年間と同様に治平年間も前線地帯の州を中心に蕃兵がいたことである。蕃兵を含めた郷兵は一種の屯田兵でもあり、ある程度食糧を自弁できる。また財政面から熙寧年間の禁軍定額を維持するのが神宗政府の方針であるから、^⑮前線地帯の州を中心に禁軍と比較して相対的に郷兵の割合が

高くなる傾向にあったと考えられる。この様な配置では前線地帯に居住する郷兵が日常の斥候や巡検下での防衛に従事し、さらに西夏の進入に対して先鋒となったのも当然であろう。⁽¹⁶⁾したがって金氏が指摘するように、前線地帯では蕃兵などの郷兵を如何に有効利用できるかが重要な課題であった。⁽¹⁷⁾

また仁宗以降、図一・二に示された堡寨以外にも多くの堡寨が辺境地帯に設けられていた。しかし多くの堡寨に兵力が分散したため、大挙侵攻してくる西夏兵への対処が困難となっていた。⁽¹⁸⁾

いっぽう後方の州に多数の禁軍が駐屯していたのは軍糧補給の利便性が重視されていたことと思われる。例えば後方に多くの就糧禁軍が駐屯していた環慶路の邠州と寧州について『長編』には、「韓絳言えらく、臣昨に渭州に至り、本路経略使蔡挺と議して辺計に及ぶ。大抵、秦・慶二路の兵、寡弱なり。宜しく各おの与に三五千人を増し、別に東兵二万を同・耀州・河中・鳳翔府より調し、糧草に就きて分屯せしむべし、と言う。挺願うらくは、自ら邠・寧州を將いて四路行營駐軍の所と為し、更に逐路の公事を領せず、止だ城守の備を提挙するを兼ね、出戦の兵馬を并せて専ら応援を為し」とあり、邠州と寧州は軍料補給の便がよく、二州に駐屯した兵を秦州や慶州方面への応援に備えるべきことが現地の経略安撫使に認識されていた。なおこの上奏は王安石によって止められたとされる。ただし翌五月には、「上批すらく、邠州等の処の駐兵、已に三將を差し専ら訓練を領せしむ。：仍お曾公亮に詔し、専ら三將の訓練を提挙し、辺事有るに遇えば、須らく兵を増して策応し、即ちに事勢を審度し、兵將をして往き、事定まって抽回せしむべし。」とあり、邠州などに駐屯した兵が応援のために訓練されていることがわかる。よってこの様な禁軍配置と前線地帯における蕃兵の重視は、宋政府にとり軍糧の確保の上からも有効であった。同時に後方に前線と同規模の禁軍兵力が駐屯していたことは、前線での有事の際に後方の禁軍を如何に有効活用するかといった課題があったと思われる。

以上のような禁軍や郷兵の配置、そして熙寧三年の更戍法改革による京西などからの禁軍の更戍という陝西にお

ける軍備の状態が熙寧八年の將兵法にどのように繋がっていくのか次章で見ていきたい。

第二章 熙寧八年の將兵法

前章では熙寧四年の兵力配置と防衛拠点を確認した。そして前線地帯では蕃兵などの郷兵そして城寨に分散した兵力を如何に有効利用できるか、後方では前線と同規模の禁軍を如何に有効活用するかといった課題があったことを指摘しておいた。そこで表二に示した熙寧と元豐の將兵法施行の史料をもとに、陝西における將兵法の施行を考えてみたい。

すでに先行研究では表二に示した史料などから陝西の將兵を編成する兵種に、屯駐・駐泊・就糧禁軍や下番の禁軍、そして蕃兵や弓箭手などの郷兵がいたことが指摘されている。すなわち涇原路における熙寧八年の將兵法施行に、「涇原路屯泊・就糧上下蕃の正兵・弓箭手・蕃兵、約七万餘人を分ちて五將と為す。」とあるように、雑多な兵種で將をつくった。そして各將が「各おの就糧・屯駐・駐泊、并せて下番の正軍・強人・漢蕃弓箭手の兵馬を統領す。」とあるように、將の下にある各兵種を総領した。また下番の軍については、熙寧八年の將兵法に、「其れ下蕃の軍馬は地の遠近に随い諸將に分隸し、本將をして官を選び訓練せしめ、経略司度りて辺事無ければ、即ち正副將をして季毎に互いに下番の州軍に往きて教閱を提挙せしむ。」とあるように、最寄りの將に分隸して各將官が訓練官を選んで下番の軍を訓練し、経略司は無事の場合、季毎に正將・副將を下番の州軍に往かせて教閱を提挙させた。

ただし小笠原氏が弓箭手について、江氏と金氏が蕃兵について論じているものの、他の研究では単に將兵が雑多な兵種で構成されていることを指摘するのみでそれ以上の言及はない。雑多な兵種が含まれた理由を明確に述べた史料は管見の及ぶところ見出すことはできない。ただし前章で確認したように、これら雑多な兵種は、同一の將兵

表二 熙寧・元豐の將兵法

路名	年 代	將兵數	史 料	出 典
涇原路	熙寧八年	五	詔涇原路屯泊・就糧上下番正兵・弓箭手・蕃兵約七萬餘人分為五將、副總管苗授為第一將、鈐轄和斌副之、姚麟為第二將、黃琮副之、姚麟為第三將、都監張繼凝副之、鈐轄夏元幾為第四將、王寧・內殿承制孫咸寧並副之、鈐轄仲諲為第五將、都監王光世副之。別置熙河策應將副、以琮・咸寧為之。從王広淵請也。	『長編』卷二六六七月戊子
	元豐二年	十一	計議措置邊防事所言、以涇原路正兵・漢蕃弓箭手為十一將、第一・第二將駐渭州、第三將原州、第四將綏寧寨、第五將鎮戎軍、第六將彭陽城、第七將德順軍、第八將水洛城、第九將靜邊寨、第十將隆德寨、第十一永興軍奉天峴。並從之。詔於分定將內別定一將、策應熙河路。	『長編』卷二九九八月辛丑
環慶路	熙寧八年	四	詔分環慶路兵五萬二千六十九・馬六千四百七十六為四將、副總管林広為中軍將、都鈐轄梁從吉副之、鈐轄神古為第二將、董穎叔副之、都監雷嗣文為第三將、知大順城寶瓊副之、都監李孝孫為第四將、慶州北路都監巡檢孫詔諫副之。	『長編』卷二六四五月甲子
	元豐二年	八	計議措置邊防公事所言、以環慶路正兵・漢蕃弓箭手・強人、聯為八將。第一將駐慶州、第二將環州、第三將大順城、第四將淮安鎮、第五將業樂鎮、第六將木波鎮、第七將永和寨、第八將邠州。從之。	『長編』卷二九六二月庚戌
秦鳳路	熙寧八年	四	詔分秦鳳路正兵二萬二百餘人、參以弓箭手・寨戶・蕃兵二萬四千餘人為四將。副都總管燕達為第一將、鈐轄康從副之、賈昌言為第二將、熙河路訓練軍馬王振副之、兼準備策應。熙河仍令達提拏。都監白玉為第三將、熙河路蕃漢都巡檢李師古副之、都監劉昌祚為第四將、階州駐泊都監皇甫旦副之。從經略使張銑請也。	『長編』卷二六三閏四月癸卯
	元豐四年	五	秦鳳路經略使曾孝寬言、本路止有五將、一將先差往甘谷城防托。今準朝旨、李憲熙河兵馬分拏不足、更抽秦鳳四將。臣本州及諸城堡寨亦當極邊、乞留合存將兵。上批、昨呂惠卿・沈括相繼已委官與經略司措置戡守兵馬、各有分定、經略司已同保明、委無未盡未便事理、何因孝寬復有此奏、令具析以聞。	『長編』卷三一五八月己未
鄜延路	熙寧八年	五以上	鄜延路經略司言、第二・第四・第五將出塞討賊獲級。詔、禁軍・兵民・蕃兵並與特支錢	『宋會要』禮六二・四七、正月十八日
	元豐元年	九	鄜延路經略使呂惠卿言、近以軍馬分定九將、已具条約奏、乞早賜指揮。詔、惠卿審度事機、以因定將兵當取裁事、逐急從宜施行、務在詳審。後上批、九將条約內、擬定將・副、恐須更選。詔送樞密承旨司呂大忠・薛昌朝看詳以聞。	『長編』卷二八八二月乙卯
熙河路	熙寧八年	四	詔分熙河路正兵三萬三千、參以弓箭手・寨戶・蕃兵、為四將。以都鈐轄王君萬為第一將、都監王崇拯副之、鈐轄韓存宝為第二將、李浩副之。秦湟為第三將、都巡檢王湛副之。鈐轄劉維吉為第四將、都監馬忠副之。仍詔湛權遣本路都監、其下蕃軍馬隨地遠近分隸諸將、令本將選官訓練、經略司度無邊事、即令正副將每季互往下蕃州軍提拏教閱。時遣樞密院檢詳文字劉奉世、同陝西諸路帥臣分兵置將、先以熙河路來上也。	『長編』卷二六一三月癸巳朔
	元豐三年	九	鄜延路經略使・兼措置陝西緣邊四路边防呂惠卿等言、分定熙河路戡守兵馬九將所領兵四萬一千三百八十九、馬萬二千四百一十八、輜重八萬三千一百三、州軍・城寨・関堡守城兵五萬一千一百九十四。從之。	『長編』卷三〇三四月丙申

に編成される以前から西夏に対する防秋に当たっている。また兵力の配置から前線地帯の就糧禁軍と郷兵、そして前線と同規模の後方の就糧禁軍の存在、さらに京西路などからの禁軍の更戍を考え合わせると、上下番の禁軍と郷兵を一体的に活用しようとすることは当然の成り行きとも言えるだろう。

なお開封府界や京西路の將兵は辺境の緊急時のほか、防秋の際にも陝西各路に駐屯していた。⁽²³⁾

第三章 元豊年間の將兵法

元豊元年（一〇七八）以降、陝西の將兵法はさらに改編を加えている。熙寧八年に雑多な兵種で編成された將兵が、わずか数年の間に改編されたわけである。この元豊年間の將兵改編について呂惠卿が、「漢蕃兵を雜えて編成し、戰守を別けることを提案した」ことを指摘したのは小笠原氏であり、この指摘をさらに進めて、漢兵と蕃兵を一つの部隊に雜ぜ合わせる「漢蕃合一策」が將兵改編の理由であるとしたのが金氏である。⁽²⁴⁾ 金氏によれば呂の改編以前、漢兵と蕃兵が各々別個の部隊に編成され、有事の際に部族から各將に招集されていた。しかしこれでは有事の際に速集することはできないとして、蕃兵を最初から漢兵と一つの部隊に雜ぜ合わせ、さらに戰守の役割を分けて五千人で一將を編成したとする。しかし筆者は両氏といささか異なる理由から元豊年間の將兵改編を理解する。そこで以下では私見を述べていくこととしたい。

まず両氏が示した『長編』（或いは同内容の『東都事略』徐禧伝）の關係箇所を挙げてみる。

初め、陝西縁辺の兵馬、蕃弓箭手と漢兵各おの自ら軍を為す。戰毎に多く蕃部を以て前鋒と為し、而して漢兵城を守り、便利を伺いて後出ず。戰守を分たず、一路毎に數將を以て之を通領す。呂惠卿鄜延に帥たり。以為えらく、調發速集すること能わず、と。始めて旧法を変え、漢蕃兵を雜えて團結し、戰守を分かちて、五千人毎に屯に隨い

將を置く。条約を具して以て上す。辺人及び議する者多く其の便ならざるを言う。⁽²⁶⁾

また『宋史』呂惠卿伝には、

惠卿始めて之を合わせて一と為し、先に守兵を蒐補し、而して其の選を出して以て戦い、屯に随い將を置き、条約を具して之を上す。辺人及び議する者多く可ならざるを言う。路都監高永亨は老将なり。之を争いて力め、奏して之を斥く。⁽²⁷⁾

とあり「先蒐補守兵、而出其選以戦」とあること、また反対者が「高永亨」であつたことが明記されるなど、『長編』・『東都事略』などと若干の違いがある。しかし内容全体では大きな差異はなく、これらの史料では漢兵と蕃兵を雑ぜることと戦守を分けることが、どうして將兵を再分割することに繋がるのか明確にはならない。換言すれば「漢蕃合一策」と戦守の役割の明確化は、必ずしも將兵を再分割せずとも可能ではないかと考えられるのである。

そこで次ぎに、より詳細な記述である『長編』に引用された『呂惠卿家伝』を見てみたい。ここでは、便宜上①呂惠卿赴任前の鄜延路の状況、②呂惠卿の改善策、③高永亨の反対意見、に分けて示しておく。⁽²⁸⁾

①呂惠卿赴任以前の状況

蓋し鄜延の兵、縁辺と下番の白地に分屯す。凡そ州軍の城寨三十有五処、而して四將皆な延に治す。每將の兵、所在に交わり、且つ兼ねて城守に隸する者有り。一日警有りて將を遣わし、東に出ずれば則ち西兵従い、西に出ずれば東も亦た然り。寨を兼ねるの卒、家を顧みるに牽かれ、守城の官、辞するに空壁を以てす。下番の遠く、又た不

時に至り、而して其の力を集め、赴きて百里の外に敵せんと欲す。故に嘗に事に及ばざるを以て患いと為す。

② 呂惠卿の改善策

公、是に于て城の広狭を度るに歩を以てし、兵を授くること古の法の如くす。足らざれば則ち餘夫を籍して之を益す。守兵既に足れば、乃ち其の選を出だして以て戦を作すに備う。地に随い將を置き、其の六つは辺境の要に拠り、其の一つは延に治し、其の二つは下番の二州に在り。將に分地有り、兵に常將有り。蕃を以て鋒と為し、漠を脊と為して缺む。將兵は戦を職^{つかさど}り、城兵は守を職る。較然として皆な統紀有り。器械糧芻の物、取具を計り、名数を籍し、条約を定む。又た守兵を以て辺を拓き、而して尽く諸將を延に合せ、大いに之を閱す。異時の調発、旬月にして集まること能わざる者、一日に辦ずべし。

③ 高永亨の反対意見

蕃兵参隸すべからず。参隸すれば変ぜんことを虞ばかり。將兵分置すべからず。分置すれば威を弱くす。士卒を閱し、牛馬を籍せば、実に戎の寇するを召^{まね}く。

以上の『呂惠卿家伝』によつて『長編』および『東都事略』徐禧伝などの記述を再検討すると、呂惠卿が「調発不能速集」と考えたのは、①にあるように縁辺と下番の地に分屯していた鄜延路の兵が、縁辺では三十五の城寨に兵士がいたにも関わらず將官は延州にいたこと、さらに戦闘に従事する者と城寨の守備にあたる者とを分けていなかったこと、そして下番の地が遠かったことなどによる。

その改善策が、②にあるように戦闘を行う兵士と守備に当たる兵士を明確に分けること、そして鄜延路の將を九

つに分けて、一将当たりの管轄地域を縮小することであった。とくに縁辺には六つの将が配置され、普段は城寨に分屯している兵士を速やかに調発できるようにした。

ここで表二を見ると、元豊二年に改編された涇原路と環慶路の将兵では、縁辺に多くの将兵を配置していることが分かる。すなわち涇原路十一将のうち八将が、環慶路八将のうち七将が前線地帯にあった。また熙河路の将兵編成では、呂の改善策にいう、「戦を職る」^{つやきと}将兵が九つ置かれ、四万一千人あまりが属し、「守を職る」州軍・城寨・関堡の守城の兵は五万一千人あまりとなっている。なお熙河路の場合、この守城の兵にも漢兵と蕃兵の両方がいた。⁽²⁹⁾したがって熙寧の状況から通観すれば、熙寧八年以前の兵力は前線地帯の堡寨に分散し、大挙して侵攻してくる西夏軍に対応することが難しかった。そのため熙寧八年、分散している兵力をいったん幾つかの将兵に配属したものの、一将当たりの調発区域が広すぎたため速集することができず、元豊年間に至って再び兵力を分割することになったのである。

さて「雑漢蕃兵」に関しては、②にあるように蕃兵を先鋒となすということから、蕃兵は蕃兵のみで部隊を編成していたのではないかと考えられる。実際に陝西の将兵再編が終了したと思われる頃、蕃兵弓箭手の「隊」という部隊編成が禁軍と同じものになっている。⁽³⁰⁾もし同じ部隊に混合するとすれば、このような処置は必要なかったであろう。ただし③高永亨の反対意見には、「蕃兵不可参隸」とあるように、将兵に「参隸」したのは確かなようであり、「参隸」とは熙寧八年における蕃兵の将兵への編入とは異なるようである。そこで蕃兵の「参隸」についていまいし考えていきたい。

呂惠卿は陝西の将兵改編ののち、河東でも将兵の改編を実施している。そこでは、「河東四路の辺面二千餘里、兵七万人。旧制畸零交錯し、戦守分かつたず、其の弊陝西の如し。」⁽³¹⁾とあって、陝西と同じ理由から将兵の改編を行った。これに関連して元祐元年の三省・枢密院の上言には、河東路安撫司の上奏と将兵再編を行った当時の安撫使

である呂惠卿の上奏とが記されている。⁽³²⁾

まず呂惠卿の上奏には、「本路見管の蕃兵少なからず、自来未だ部分有らず。其の間も亦た事藝淺軟、或いは年已に老弱なるもの有り。恐らくは緩急の出入未だ齊整なるを得ず。臣、官を差して禁軍の例に依り、指揮を団成す。乞うらくは永遠に遵守せんことを。」とあつて、河東路の蕃兵が未だ指揮に編成されていないとして、禁軍の例に依り団成し、永遠に遵守するように請うた。よつて蕃兵のみで指揮を編成したのは明らかである。これに対して後の安撫司の上奏には、「其れ蕃軍上番に遇えば、分撃して第六・第八將副の下に在り、正兵に随い出入差使す。下番の日に至れば、各おの逐堡寨の地分の本家に歸りて耕作す。今欲すらくは、本路の蕃兵を將て、旧に依り堡寨をして管轄せしめ、内府州の蕃兵、折氏專一に管勾するに係るの外、其れ麟・嵐・石州の蕃兵并びに捉生、更に將下に隸屬せず、各おの本州の知州をして管勾を提拏せしめ、応合に守把・鋪分等の差使に差す及び緩急に將佐に随い出入すべきは、並びに旧例に依らんことを。」とあり、蕃兵は上番の時には各將副に分かれ、下番になると各々堡寨に歸つて各家で耕作を行つていた。そして旧来は堡寨の管轄下にあり、將下に隸屬していなかつたことがわかる。したがつて將兵に「參隸」するとは、蕃兵の管轄が堡寨から各將官に移つたことを意味する。

具体的な事例を陝西において見てみると、元符二年（一〇九九）の環慶路安撫司の上言によれば、環慶路では蕃弓箭手が諸寨に散居し、地分に随い諸將に隸屬していた。⁽³³⁾ また涇原路の蕃兵は、「自来以て近便に住坐し、分隸して逐將下の所管に在り。凡そ出入有れば、本將全て引路・探望・伏截・捉人・使喚に藉り、集むるを得るを為し易く、蕃兵も亦た枉て盤纏を糜費する有る無し。」⁽³⁴⁾とあり、近便のところに居住して、各將下の所管に分隸し、日頃は引路・探望などに当たつていた。さらに紹聖四年の章榘の上言によれば、新たに城寨を創つたとき、城寨官が置かれたにもかかわらず、涇原第十一將が城寨を提拏して⁽³⁵⁾いた。

ところで蕃兵が蕃兵のみで一部隊を編成し將に隸屬したならば、金氏らが提示した史料の「雜漢蕃兵団結」とは

どういふことなのか。まず「団結」という言葉の用例について將兵に関連した事例では、林駟の『古今源流至論』に引く『祖宗官制旧典』に、「將を分かちて州郡の兵を籍し、一路を通じ五千人を団結して一將を為り、將副を置きて專領せしむ³⁶⁾。」とあり、また『嘉定鎮江志』には、「元豐四年、又た詔す、東南路の諸軍を団結するに、京畿の法の如くす。凡そ十三將、浙西路を第三將と為す。而して將兵此に防む³⁷⁾。」とある。よつて將兵に関する限り、將を編成することを「団結」という。

さらに元豐六年（一〇八三）、李憲が熙河路の漢兵と蕃兵を、それぞれ別個の將兵に編成することを上言した記事には、

熙河蘭会路經略制置司李憲言えらく、本路九將の名有りと雖ども、其の實、數に闕くること多く、緩急に驅策するに給せず。又た漢蕃の兵馬雜して一軍と為し、今未だ戰に出ざるを論ぜずして、其の它、害を為すこと已に多し。臣今熙州に至り、已に各おの五軍の將副及び都同總領蕃兵將を定め、逐州軍の正兵・漢弓箭手を用て各おの一軍と為す。其れ蕃兵も亦た各おの一軍と為す³⁸⁾。

とあり、ここでは「漢蕃の兵馬雜して一軍と為す」ということが、漢蕃の兵馬を雜して一將と為す、ことと同じ意味で用いられている³⁹⁾。したがつて「雜漢蕃兵団結」とは、「漢蕃の兵を雜して」將を「団結」したことになる。そして熙寧八年の將兵法と異なる点は、蕃兵が禁軍と同じ編成の部隊となつて漢兵の部隊とともに一將下にあり、かつ蕃兵の管轄が堡寨から各將官に移つたことであつた。

最後に前線地帯と同規模の兵力があつた後方の州の就糧禁軍について確認しておきたい。

鄜延路の後方の州は、鄜州と坊州・丹州の三つである。『呂惠卿家伝』では鄜延路の將兵のうち六つは辺境の要

所に、一つは延州に、そして二つは下番の州に置くことになっている。さらに元豊五年の沈括の上奏によれば、鄜州と河中府に将兵が配置されており、この二州が下番の州であったと思われる。⁽⁴¹⁾

涇原路では渭州と儀州・涇州の三つが後方の州であった。このうち将兵が配置されたのは表二の史料から、渭州と儀州（熙寧五年に渭州に編入）であり、第十一将は永興軍奉天県にある。元符二年の涇原路経略使章恣の上奏には、涇原路の将兵の兵力が正兵と弓箭手を合わせて七万餘人、下番の正兵は永興及び奉天県にあり、その他は渭・西安州・鎮戎・德順軍などにあるとする。⁽⁴²⁾

環慶路では、鄜州と寧州の二州が後方の州であった。表二により、第八将が鄜州に置かれた。

秦鳳路の将兵配置はあまり明らかではない。後方である隴州・成州・階州・鳳州のうち、階州に将兵が置かれていたであろうことは察せられる。⁽⁴³⁾

以上のように、後方の州では将兵に編成されたものと編成されなかったものがある。編成されなかった州は表二の熙河路のように、「州軍・城寨・関堡守城兵」として州の守備に専念することになったのであろう。したがって後方の就糧禁軍については将兵に編成されて対西夏防衛に従事する禁軍と、州の守備に専念する禁軍に明確に分けられた。ただしこれら将兵の置かれなかった州にも京西や府界の将兵が駐屯している事例が見られる。⁽⁴⁴⁾

いっぽう軍事路の管轄地を越えて鄜延路将兵が河中府に、涇原路将兵が永興軍奉天県に置かれたことも元豊年間の改編の大きな特徴といえる。ただし郷兵は渭州に置かれた第十一将と、奉天県に置かれた第十一将には置かれておらず、郷兵が後方の州には含まれることは少なかったと思われる。⁽⁴⁵⁾

結 語

陝西における兵力の分布は、就糧禁軍が前線地帯にも後方にも相当数配備されたのに対して、蕃兵や弓箭手など

の郷兵は従来から前線地帯に多く居住していた。そこに京西路や開封府界などからの屯駐・駐泊禁軍が加わっていたが、熙寧八年の將兵法ではこれらの雑多な兵種が一つの將の下に置かれることになった。

いつぼう辺境地帯には多くの城寨が建設され、兵力が分散しすぎることが問題となっていた。熙寧八年の將兵法をみると、涇原路では七万人あまりで五つの將が編成されており、一將あたり約一万四千人となる。また環慶路では五万二千人あまりで四つの將が編成され、一將あたり約一万三千人となる。しかし一將ごとの調発範囲が広すぎるため、緊急の際に多数の城寨から集結することが困難となった。そこで呂惠卿の提案によって戦守の兵士を明確に分けたうえで將兵を再分割し、鄜延路では九將（一將五千人）、涇原路では十一將（二將約六千四百人）、環慶路では八將（一將約六千五百人）とした。実際に環慶路第三將は、六千人の兵で界を出て賊と戦っている。さらに蕃兵も禁軍と同じ部隊編成となり、城寨の管轄から將官の管轄下に移った。

このように陝西における対西夏防衛は雑多な兵種が広範囲に分布するという陝西特有の事情から、いかに雑多な兵種を有効に用いることができるか、そして各城寨や後方に分屯する兵士をいかに迅速に集結できるかという課題があった。その克服のために將兵法が実施され、さらに改編が行われた。呂惠卿の改編以降、將兵の数は増加傾向にあり、また熙河路では蕃兵と漢兵それぞれで將を編成したりと、地域の事情や時勢に合わせて將兵法はさらに手が加えられていくのである。

註

- (1) 李昌憲『宋代安撫使考』（齊魯書社、一九九七）。渡邊久「北宋の経略安撫使」（『東洋史研究』五七四、一九九七）
- (2) 陝西諸路の將兵に禁軍以外の兵種が存在したことは従来から指摘されてきた（王曾瑜『宋朝兵制初探』第四章（中華書局、一九八三））
- (3) 江天健「北宋陝西路沿辺堡寨」（『食貨月刊』十五・七・八、一九八六）、李華瑞『宋夏關係史』（河北人民出版社、一九九八）、呂卓民「簡論北宋在西北近辺地区修

築城寨の歴史作用」(『西北大学学报(哲学社会科学版)』二八一三、一九九八)、大室智人「北宋時代における西北辺の防御拠点について」(『アジア史研究』三〇、二〇〇六)

- (4) 小笠原正治「宋代弓箭手の研究(前篇)」(『東洋史学論集第二』不昧堂書店、一九五四)、同「宋代弓箭手の性格と構造」(『東洋史学論集第三』不昧堂書店、一九五四)、同「宋代弓箭手の研究(後篇その一)」(『東洋史学論集第四』不昧堂書店、一九五六)

- (5) 江天健「北宋蕃兵」(『国立新竹師範学报』八、一九九五)、金成奎「宋代の西北問題と異民族政策」第七章(汲古書院、二〇〇〇)

- (6) 久保田和男「宋都開封と禁軍軍營の変遷」(『東洋学报』七四・三・四、一九九三)

- (7) 『統資治通鑑長編』(以下「長編」と略称) 卷二一六、

- 熙寧三年十月癸亥

- (8) 『長編』 卷二一八、熙寧三年十二月己未

- (9) 『長編』 卷二二五、熙寧四年七月辛亥

詔頒陝西四路防秋之策。

涇原路。賊若寇原州靖安・綏寧、則原州兵不出、以万人守平安、控南路。趨渭州、以鎮戎軍將兵・弓箭手、由乾興徑入靖安、斷賊歸路。賊若寇鎮戎軍、即以万人并本將軍馬駐本軍、以弓箭手五千人為遊兵、別以五千人守瓦亭、更移靜邊寨所駐正兵・弓箭手取三川路合勢。賊若寇德順軍、即別以万人屯守靜邊、兼以弓箭手五千人為遊兵、逐便擾擊、移瓦亭五千人入本軍。賊若自武延・易臧川而

來、即移靜邊兵駐隆德、扼賊歸路。鎮戎軍第四將及弓箭手由得勝路會合。其諸城寨只留守兵、不責以戰。渭州只以一將兼義勇防守、其餘兵並屯瓦亭、以固根柢、左右相援、合勢掩殺。

環慶路。賊若寇東北兩路、並以正兵万人屯業樂、扼淮安・東西谷・柔遠・大順之會。

賊若自華池路深入、則移業樂兵於大順・荔原兩路、斷其歸路。慶州別出兵至合水、与荔原・大順兵、相首尾。賊若寇環州、即移業樂之兵、截山径路趨馬嶺、更相度事勢、進兵入木波、与環州相望、扼諸寨中、又可扼奔衝慶州大路。其沿辺城寨、只留守兵、不責以戰。自餘軍馬并屯慶州、以固根柢。

秦鳳路。若賊寇東西路、於甘谷城屯正兵五千、帖以蕃漢弓箭手、扼奔衝青雞・三陽一帶道路、別以正兵五千帖本處蕃兵弓箭手守古渭、更益都巡檢軍馬及三千、扼通渭、与甘谷・古渭相望。若約此置兵、保護熟戶、更相首尾、足以枝梧。其諸城寨只留守兵、不責以戰。自餘軍馬並屯秦州、以固根柢。

鄜延路。若賊寇東路、宜於永平駐兵万人、帖以本處蕃漢弓箭手、以扼綏德・黑水・綏平・懷寧・順安・青澗之會。亦斷青化・豐林趨延州大路。又恐自永平東循大川、至青澗城南出延州、則青澗亦駐兵三千。若賊寇北路、由渾州塞門川而下、則永平更不消駐兵、只以万人駐金明泉、扼園林・安塞・龍安・招安・故寨門・安遠之會、斷延州大路。保安順寧路窄、難出大兵、只以三千守軍、帖以蕃兵弓箭手、足以扼賊。賊寇西路、只以三千人守德靖、兼

以蕃兵保護胡・李^二族、則金明不消人馬、可那赴万安、為保安・德靖聲援。或西北兩路并兵而來、則金明兵不動、別以五千人守万安、擒賊之後。其沿辺城寨並只留守兵、不責以戰。自餘軍馬並屯延州、以固根柢。

傍線部は『宋会要輯稿』兵二八・一〇、備辺二、熙寧四年十月による。

- (10) 畑地正憲「北宋時代における陝西四路の防衛戦略について」(『山口大学文学會志』五九、二〇〇九)

- (11) 『武経總要』卷一八上、辺防、陝西路

- (12) 前註(4)小笠原氏

- (13) 『長編』卷二三八、熙寧五年九月壬申。同卷二二二、熙寧五年四月己未

- (14) 『長編』卷二〇二、治平元年九月戊子、是秋

- (15) 前註(6)久保田氏

- (16) このような先ず蕃兵が攻撃を行って、その形勢を見てから正兵が攻撃を行う様子は、前註(3)大室氏・前註(5)金氏によって指摘されている。

- (17) 前註(5)金氏

- (18) 前註(3)大室氏

- (19) 『長編』卷二二二、熙寧四年四月庚申

韓絳言、臣昨至渭州、与本路経略使蔡挺議及辺計。大抵言、秦・慶二路兵寡弱。宜各与増三五千、別調東兵二万於同・耀州・河中・鳳翔府、就糧草分屯。挺願自將於邠・寧州為四路行營駐軍之所、更不領逐路公事、止兼提拳城守之備、并出戰兵馬專為応援、候知賊界点集及來犯一路、即領所將二万、或更於鄰路追兵往彼、与本路出戰

漢・蕃兵会合、分守要害、令諸城寨為清野堅壁之計、乘賊疲憊即往襲擊。如此則比慶曆以前陝西増兵其数至少、所費易辦。臣察挺実有才謀、処置一路辺事、訓練撫遏、恩威並行、觀其策画、顯尽忠力、望召挺赴闕。王安石以為、專委挺、則挺必為本路計太多、恐不便於諸路、奏寢不報。

- (20) 『長編』卷二二三、熙寧四年五月乙酉朔

上批、邠州等処駐兵、已差三將專領訓練。既欲為精銳破賊之軍、須督責所差將官、嚴切教習、量賜金帛、使賞激士衆。仍詔曾公亮、專提拳三將訓練、遇有辺事、須増兵策応、即審度事勢、遣兵將往、事定抽回。

- (21) 『宋会要輯稿』兵五十八、屯戍、熙寧七年十二月二四日詔權發遣慶州范純仁、權同判武学劉奉世、看詳鄜延路分

將文字、当如何措置以聞。其後純仁等言、相度將本路第一將駐慶州、第二將環州、第三將大順城、第四將淮安鎮、第五將業樂鎮、第六將木波鎮、第七將永和寨、第八將邠州、各統領就糧・屯駐・駐泊并下番正軍・強人・漢蕃弓箭手兵馬。從之。

ここに挙げた環慶路の將兵法では、八つの將に編成され、「從之」と裁可されている。しかし表二にあるように、翌八年には改めて四將に編成する詔が出されている。短期間で八將から四將へとたびたび変更がくわえられたとは考えにくく、したがって七年の范純仁らの上言は実現しなかったものと判断した。ただし四將の編成でも、そのなかには就糧・屯駐・駐泊禁軍が含まれたと思われる。

(22) 『長編』卷三三八、元豐六年八月辛巳

詔差府界第二將・京西第四將赴鄜延路、京西第三將赴河東路、以兩路言牒報邊警、乞增兵也。仍令劉昌祚・王君卿、如邊警不急、即且以所差將兵於近裏易得糧草州軍駐劄、以備勾抽。

『長編』卷四七二、元祐七年四月戊午

詔永興軍、權駐泊京東第三將權戍涇原路。以經略司言西賊於鎮戎・德順軍出沒、乞增兵故也。

(23) 『長編』卷三四九、元豐七年十月己巳

詔、涇原・鄜延兩路發赴城・寨・堡鎮防秋諸軍、比諸路特早、並与特支錢。

『長編』卷三五〇、元豐七年十一月庚子

樞密院言、準朝旨、涇原路差赴城・寨・堡鎮防秋卒、比之諸路早發、並与特支。其常例差發者不給。涇原路經略司誤比類該說、不尽指揮給渭州防秋府界第四將。詔軫運司劾罪、已支錢更不拘收、勒干繫人均備。後經略使盧秉言、誤給錢乞独坐罪。詔秉罰銅二十斤、劾俸罪均備指揮不行。

(24) 前註(4)小笠原氏

(25) 前註(5)金氏

(26) 『長編』卷一九七、元豐二年三月丙戌(一)『東都事略』

卷八六、徐禧伝)

初、陝西緣辺兵馬、蕃弓箭手与漢兵各自為軍。每戰多以蕃部為前鋒、而漢兵守城、伺便利後出。不分戰守、每一路以數將通領之。呂惠卿帥鄜延。以為、調發不能速集。始變旧法、雜漢蕃兵團結、分戰守、每五千人随屯置將。

具条約以上。辺人及議者多言其不便。

(27) 『宋史』卷四七一、姦臣一、呂惠卿伝

始、陝西緣辺漢蕃兵各自為軍。每戰則以蕃部為先鋒、而漢兵城守、伺便乃出戰。惠卿始合之為一、先蒐補守兵、而出其選以戰、随屯置將。具条約上之。辺人及議者多言不可。路都監高永亨、老将也。争之力、奏斥之。

(28) 『長編』卷二九八、元豐二年五月己巳条の原註

家伝云、公既至延、考昔之措置、參差抵牾、誠如上指。蓋鄜延之兵、分屯緣辺与下番白地。凡州軍城寨三十有五处、而四將皆治延。每將之兵、所在交、有且兼隸城守者。一日有警遣將、東出則西兵從、西出東亦然。兼寨之卒、率于顧家、守城之官、辞以空壁。下番之遠、又不時至、而欲其集力、赴敵于百里之外。故嘗以不及事為患。公、于是度城広狭以步、授兵如古法。不足則籍餘夫益之。守兵既足、乃出其選以備作戰。随地置將、其六扞辺境之要、其一治延、其二在下番二州。將有分地、兵有常將。以蕃為鋒、漢為脊鋏。將兵職戰、城兵職守。較然皆有統紀。器械糧芻物、計取具、籍名數、定条約。又以守兵拓辺、而尽合諸將於延、大閱之。異時調發、旬月不能集者、一日可辦。乃具上之。会夏人以兵壁対境、詔許以新法從事、而樞密院有不說公者、持難久之。辺將高永亨自以姦賊、不利公為之帥、乃騰說以為、蕃兵不可參隸。參隸虞妄。將兵不可分置。分置弱威。閱士卒、籍牛馬、実召戎寇。

傍線部は原文に誤りがあると思われる。

(29) 『長編』卷三四九、元豐七年十月戊寅

詔、定西城守城漢・蕃諸軍并百姓婦女、城上与賊闘敵者、

人支絹十匹、運什物者、七匹、城下供饋雜役者、男子五匹、婦人三匹。

(30) 『長編』卷三〇八、元豐三年九月戊子

熙河路經略司言、乞先團結弓箭手、從之。是年詔、凡弓箭手・兵騎各以五十人為隊、置引戰・旗頭・左右廉旗、及本屬蕃酋・將校為擁隊、並如正軍法。蕃捉生・蕃敢勇・山河戶亦如之。

(31) 『長編』卷三四四、元豐七年三月庚申的原註

(呂惠卿) 家伝云、：河東四路迎面二千餘里、兵七萬人。旧制崎零交錯、戰守不分、其弊如陝西。惠卿因為十二將、二將以備北、一將在嵐・石、一將在府州、而八將番戍河外。凡所以措置、一切用陝西之法。

(32) 『長編』卷二八五、元祐元年八月丁酉

三省・樞密院言、河東路經略安撫使司奏、昨有河東路安撫使呂惠卿奏、本路見管蕃兵不少、自來未有部分。其間亦有事藝淺軟、或年已老弱。恐緩急出入未得齊整。臣差官依禁軍例、團成指揮。乞永遠遵守。準朝旨、河東路令經略安撫司牒麟府路軍馬司、相度利害聞奏。本司牒麟府路軍馬司相度、實為不便、兼第十二將止是府州折氏下蕃部。昨令折克行充正將外、更添差到副將一員、部隊將共一十五員。其蕃軍遇上番、分擊在第六・第八將副下、隨正兵出入差使。至下番日、各歸逐堡寨地分本家耕作。今欲將本路蕃兵、依旧堡寨管轄、內府州蕃兵、係折氏專一管勾外、其麟・嵐・石州蕃兵并捉生、更不隸屬將下、各令本州知州提管管勾、應合差守把鋪分等差使及緩急隨將佐出入、並依旧例。所有元豐七年朝旨內、蕃兵・捉生隸

屬將下一節、并當年十二月、蕃兵團五指揮部分朝旨、乞更不施行。及除折克行依旧兼帶第十二將外、其副將并部隊將乞免罷、所貴於蕃情・辺計各得安便。從之。

(33) 『長編』卷五〇九、元符二年四月丁酉

(34) 『長編』卷五〇七、元符二年三月壬子的原註

臣僚劄子奏、訪聞得、涇原路蕃兵、自來以住坐近便、分隸在逐將下所管、凡有出入、本將全藉引路・探望・伏截・捉人・使喚、易為得集、蕃兵亦無枉有糜費盤纏。

(35) 『長編』卷四八六、紹聖四年四月甲辰

(36) 林駟『古今源流至論』続集卷二、兵權
分將籍州郡兵、通一路團結五千人為一將、置將副專領。

(37) 『嘉定鎮江志』卷十、兵防

元豐四年、又詔、團結東南路諸軍、如京畿法。凡十三將、浙西路為第三將。而將兵昉乎此。

(38) 『長編』卷三三八、元豐六年八月辛巳

熙河蘭會路經略制置司李憲言、本路雖有九將之名、其人多闕數、緩急不給驅策。又漢蕃兵馬雜為一軍、今未論出戰、而其它為害已多。：臣今至熙州、已各定五軍將副及都同總領蕃兵將、用逐州軍正兵・漢弓箭手各為一軍。其蕃兵亦各為一軍。

(39) 蕃兵と漢兵が別々に將を編成したことについては、前註(5)金氏参照

(40) 『長編』卷三二六、元豐五年五月丙午

(41) 元祐七年、鄜州に第九將、河中府に第八將が置かれて

いるのが確認される(『長編』卷四六九、正月壬子)。

(42) 『長編』卷五一八、元符二年十一月辛未

(43) 表二、熙寧八年の秦鳳路、及び『長編』卷三四一、元

豐六年十一月丁卯

(44) たとえば、環慶路の將兵が置かれなかった寧州に、府

界第七將、京西第二將が駐屯していた。

『長編』卷三二六、元豐五年五月癸卯

環慶路輶運判官范純粹乞日嚴辺備、又言、至寧州見当職

官、言本州駐劄兩將、自軍回後、死者過五百餘人、及有

二百餘人疾病、逃亡亦過二百餘人、本將不敢尽申。尋勘

會寧州歇泊將兵、係開封府界第七將、京西第二將。詔本

將分析、仍令本路經略司体量。

(45) 『長編』卷三三五、元豐六年六月戊午

彭孫言、涇原路蕃兵皆富有、出入止是雇人僕從軍、蓋旧

無正官管轄、遇軍行始差將副、人心不相暗、故難指呼。

乞差蕃官兩員及暗事將官、同管轄処置、庶皆得素養之兵

為用。詔經略司看詳立法。已而經略司奏、漢・蕃弓箭手

兵馬、從來係第二至第十將統領訓練、別無不便、難以便

差蕃官。從之。

(46) 『長編』卷四七五、元祐七年七月丁酉

(47) 將兵数の推移については、(李昌憲「宋代將兵駐地考

述」(『大陸雜誌』八五・五、一九九二))を参照。